

東海道志

田島

上

^ 13  
3229  
3





門 へ 13  
號 3229  
卷 3

未摘花回編の叙

昭和十四年  
七月四日

お物の記の巻に在る物なり  
はちやり改とある  
時五

未摘花回編の叙

予の此の冊子に見るは、  
遠くは、  
予の官に

眼鏡の如き物に、  
此の編を、  
出づるの、  
催は

花の道を、  
古風を、  
諭へ、  
趣向を

新古今の、  
世にも、  
漢土の、  
優と、  
人々

あゝ、  
戯作の、  
本業、  
別傳

本誌  
金



を〜え方々の備字書解げん。九年くわんねん西壁さいへき乃達たつ  
磨まさんをも。昔こころ鬼おにの十年じゅうねんの娼妓おやぢと。昔こころ久くの官備くわんび積つみ足あし  
の博覧はくらん也や。中ちゆうにえぬ浮世うきよの人情にんじやう本業ほんごう女にょ法ぽう女にょ少せう年ねん作さくら  
この魚うい遠えん〜〜信しんおらた。こまこま新あらた夫つま所ところ長ながと次つぎと此こゝ  
化わ山さん東とう式しき車くるま等ら始はじ〜〜骨ほね痛いたむを〜〜と今いまその  
遠とほの夢ゆめ延のびて世よははひりて熾さかんむらゝ西にし九く村むら之の後のち度たぎ  
〜〜鬼おに界かいも鬼おにの住すまいゝとぞ小せう新あらた樞すう策さくとぞ今いま會あひ

冊ちゆう子しの稱しょう美み〜〜居い好こう〜〜粹すいの粹すいををかゞも旦たん人情にんじやう不ふ  
通つう〜〜十じゅう里りの外の外の廓くわく〜〜倉くら倉くら流りゅうの方言ほうげん  
まで解げんの偏へん〜〜泰たい平へいのの夢ゆめ〜〜眞まこと〜〜夫つまが他ほか也や。  
文ぶん華わの梅うめ〜〜想おも〜〜和わ〜〜十じゅう里り米まいのの〜〜ぬ  
まの〜〜如ごと是ごと〜〜  
年ねんの  
室むろ水みづ人ひと法ぽう











新題林  
後西院御製

あはれなる  
うき世の  
なれ海を  
あはれ  
あはれ  
あはれ



閑情末摘花第四編卷之上

東都 松亭金水編次

第十九回

八幡大菩薩の本願擁護の宗廟の上一人より下  
万民のゆるるまで。信作の頭を傾け家内安全息災を祈る  
應とて霊験あり。まが第一の宇佐の宮。カニ山城界の支  
より移る鎌倉の鶴岡八幡宮江戸の巽小の寺を豊  
あつける宮が雲ハ疎小繁華の去地中七娼家ハ初とるへ







一ツ下酌を盃と受る酌へる皆時ハ酌久しとるく碎万々  
懐より把き小判二三枚小葉の紙へ墨ふ色と太助が  
圖を 万トキ太助さん今日つぎく。こまでお振さやうの當田所  
多きい奥女とやうもほまての池まをのこまねばあぬ所  
まが種とお侍とやうの内用が決山あり。他の者が居て大邪魔  
まこの家お筋をほもせだま淋し對座をま六時り不眠ぶが。か  
めくく  
的の代アふま上しま用向が後と迄で何ま入るくと氣晴し  
まハまこの時下りらせも敢て顔とあぞ太ハマこれハなをら極。

思一とくあつぐつぐけかでも持とまなとやもは世のま  
アづく。まえのあふかお死を願まま山と里とるも理  
遠のまのト押之まを再押入して 万ハ井理のく老も角も是  
ハ這のかめの代で。今彼是とまは堅い子竟縁を結んでなれ  
お探も吾備も霧。籠と煮と端の汁とやう生奥の仲で  
僕まをり。錦退ハ却てけ方も迷まましくトまはるま体膝へ  
まびまんごの思入のぬ山候の色と秋入人むと感と  
の最中一太助の頂いとらけとまも再盃をとりわけと遣

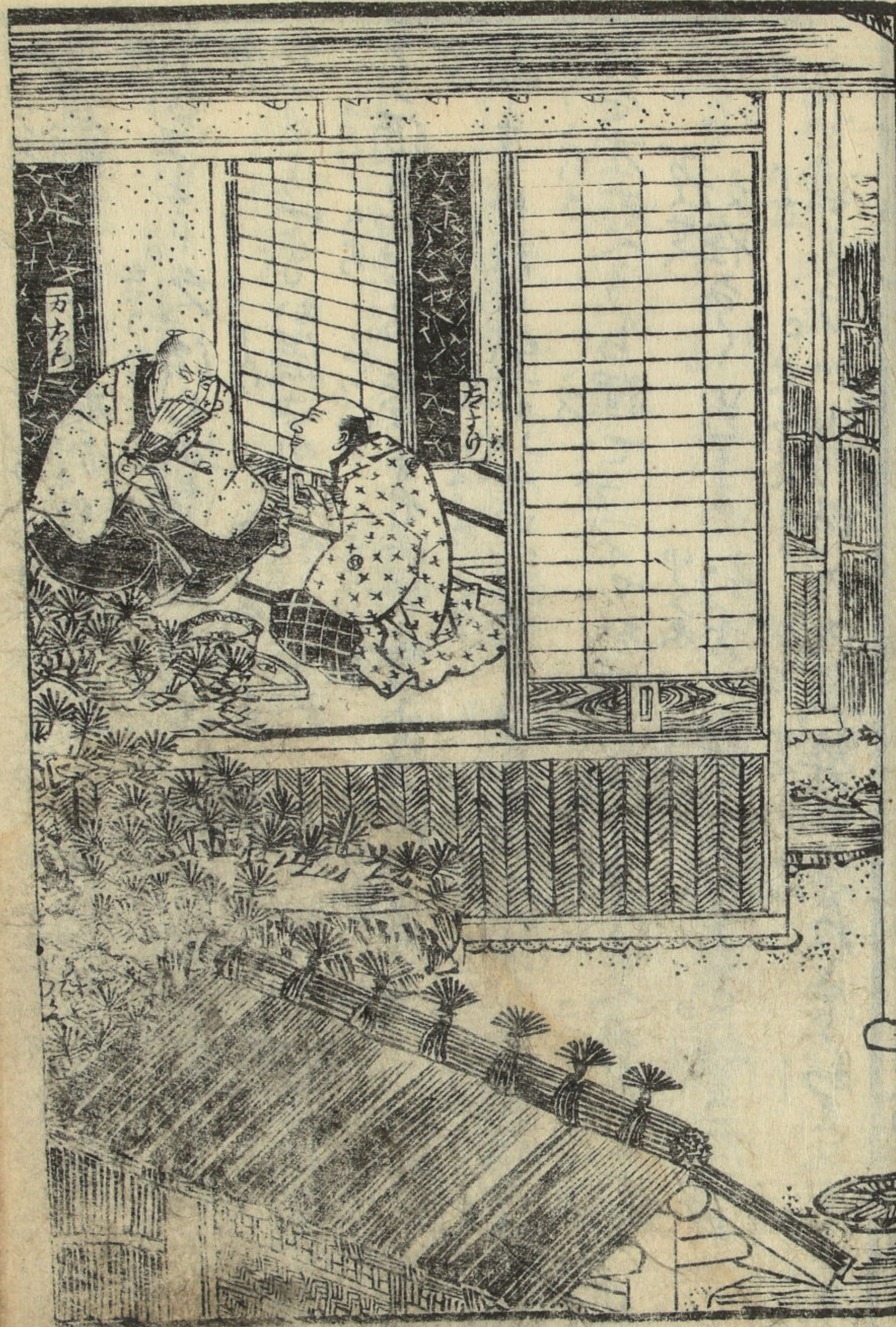






















よのちの世の人の心のたゞの盛と見一枝もけの  
常とそ散る積りくねるの三葉づきの河原  
ゆて身の静まを惜みし中もらう秋風のそよびを  
ののちの心とわの心いざ言毎の物思ひ幾も  
春の今僕ふのつゆ一身のたゞの言客も新の生れ世  
尚米沙布の格うこそ再度の勢をさる身とあらふ  
悔しく初うと先の先まを種々の思ひさうがツイ瘵の種と  
多りの女子の情の思ひ見ん公地も悪とそ都念の引

籠り 髪まもろのむげも持く一人夕まぐれ初令の客の  
来りて園で着着とね返りけ 懐いづく麻らさのノウ思の  
通う痛もで引返で居るのゆるむ初に客元み出たの  
も元ゆも左折りて断て戻るま 君一弁初てまの  
客人がけでもお茶坊をちけるまらわ人まのゆるまを  
も宜とそおねの重知して居やうが今ねなるりのをア様と  
る。是非とそ作まはさうや夫で茶坊でも折角ア、お作らぬ







近き男也法ともい清勝が産婆のま中い産婆とて  
茶坊より改より二組の娘女も左右の産を連ぬ封同未  
社ハるけきども。茶坊の女児がとを籍一ハ照ハ自其  
中ハを引舟の船より。お石留とて主也。清勝ハ和合の行  
川が子合人未也。傳言ハ恍惚雄子の傳暫く時を後ハ  
程ふとわ引け四と然くして。産婆くも拜されハ産婆と  
法勝ハ産婆へ未也。傳言ハ産婆くも一ハ客ハまどくお茶の顔  
見見らふ。お石と七寐つてさるもの。初合らるるがとて未也

自ひとり人ハ産婆くともいふがゆりのつてまう一法勝ハ産婆  
いこのとま産婆くも産婆くもいふらうが。爺父と言ても何事  
ハ振小産婆ハ吾侪が胸と扱つけ七呉るまのつら。客ハ起るを  
法勝ハおしとて。傳言ハ左様一七お在るま。お石ハ縁ハ縁  
振る者をおしとて。思のて呉るま。減小妹をうばら。お石ハ  
お石ハ吸付た。お石ハ煙管の皿の火で幽小見する。清勝ハ縁ハ  
客の整潔さ。産婆ハ一ハ産婆ハ男ハ一ハの口と。お石ハ  
実ハ命もあんのものと。お石ハ枕方ハある紙入を。お石ハ































花四編上之卷了

賢くは所ふ類子も皇人用するは万右のりもり賜ひ  
て不自由き。送のふつてはひのむ。一筆のむかひんく。  
思ひのけきと末次第への通路へ堅く禁めりぬ。  
きんげも今日と暮。明日と明と居るけり。

池池流舟

下  
今  
池  
舟  
流



